

海外研修報告：ソウル大学校図書館

兵藤，健志
九州大学附属図書館eリソースサービス室eリソースサポート係

<https://doi.org/10.15017/15446>

出版情報：九州大学附属図書館研究開発室年報. 2008/2009, pp.40-45, 2009-07. Kyushu University Library, Research and Development Division

バージョン：

権利関係：

報告

海外研修報告
—ソウル大学校図書館—

兵藤 健志[†]

<抄録>

2009年1月8日から3月6日までの約2ヶ月間にわたるソウル大学校図書館での研修について報告する。

Training Program in Seoul National University Library

HYODO Kenshi

1. はじめに

海外研修として2009年1月8日から3月6日までの約2ヶ月間にわたり、本学協定校であるソウル大学校の図書館に滞在する機会を得た。

九州大学附属図書館とソウル大学校図書館の友好関係は、1999年に図書館間交流協定を結んだことに始まる。図書館間交流協定は2001年に大学間交流協定へ包摂されて発展的に解消となったが、その後も、図書館業務に関する覚書を調印して人的交流を深めてきた。

その交流の一環として、これまでソウル大学校図書館から客員図書館員を2名受け入れてきたが、今回は本学附属図書館から筆者がソウル大学校図書館へ長期派遣され、現地で図書館職員研修プログラムを受けることとなった。

以下はそのソウル大学校図書館で受けた研修の報告である。

2. 研修

2.1. 目的

ソウル大学校図書館職員との信頼関係を深め、さらなる人的ネットワークを構築することはもちろんのこと、韓国語能力を向上させることも研修の重要な課題の一つである。2008年度の九州大学における出身国別留学生数をみると、総数1,292名のうち、韓国からの留学生は209名で、中国からの留学生579名について多く、全体のおよそ16パーセントを占めている。よって、英語だけでなく韓国語を習得することは、留学生への図書館サービス改善につながることを期待される。

また、ソウル大学校を中心とする韓国の図書館事情を全般的に調査することも研修の主要な目的である。筆者にとって、これまで図書館訪問のために滞在した

アジアの国は、シンガポール、マレーシア、韓国、フィリピン、台湾の5カ国であり、アジアの図書館動向は常に気になる場所であった。今回の訪韓は2度目であり前回はプサンに数日程度の滞在であったので、今回のソウルでの長期研修は、韓国の図書館概要について把握するのに絶好の機会となった。



写真1 ソウル大学校中央図書館

2.2. 受入体制

2009年1月8日にソウル大学校中央図書館(写真1)に迎えられ、翌日から訪問図書館員として研修を開始した。11名の職員からなる行政支援チームが今回の受入に責任を持つ部署であり、その中でも特に、国際業務担当の方に研修内容の調整や生活面の手配なども含めてお世話をしていただいた。研修中は筆者にも国際業務担当の事務室に専用デスクやパソコンや電話までもが用意されていて、非常に快適な環境(写真2)であった。また、行政支援チームの一員として、チーム

[†] ひょうどう けんし 九州大学附属図書館eリソースサービス室eリソースサポート係 E-mail: kenshi@lib.kyushu-u.ac.jp

内ミーティングに出席し、現在の研修状況やこれからの予定について報告を毎週のように求められた。



写真2 専用デスク

なお、筆者が訪れた1月初旬から3月初旬は気温が氷点下を記録する寒さの厳しい時期であり、大学は後期授業を終えて休暇に入っていた。ちなみに、韓国の大学における学年度は、日本の大学より1カ月サイクルが早く、卒業式が2月末に行われ、入学式が3月初めに行われる。つまり、筆者はちょうど年度の切り替わりの多忙な時期に受け入れていただいたことになる。

また、宿舎としてキャンパス内にある Hoam Faculty House (写真3) という施設の提供を受けた。とても広い部屋で、洗濯機やキッチンなどの生活家電が完備しており、快適な日常生活を送ることができた。不足する日用品や食料品はすべて宿舎から近いキャンパス内の売店で入手することができた。キャンパスは坂が多く、宿舎から図書館まで徒歩20分の道のりは毎朝良い運動になった。



写真3 Hoam Faculty House

2.3. 研修プログラム

現地では韓国語の習得とソウル大学校図書館の全般的把握ができるような研修プログラム（語学研修と実

務研修）を編成していただいた。

2.3.1. 語学研修

ソウル大学校には言語教育院韓国語教育センターという施設があり、そこで外国人向けの韓国語講座を提供している。しかし、残念なことに、今回の研修としては時期やレベル的に適切なコースが無く、そこでの授業を受講することができなかった。

その代わりに、毎週月曜日の18:30から20:00まで学内の職員によるボランティアの韓国語クラスがあり、そこに参加することになった。授業では、初級テキストを使って、主に会話の練習が行われた。授業は韓国語で行われるので、初級といえども理解するには苦労した。受講生は、3~5名程度で、いずれもポストドクターとしてソウル大学校で働かれている方々であった。

2.3.2. 実務研修

実務研修としてソウル大学校の図書業務全般に関する情報交換および実務体験を行うことができた。(写真4)



写真4 実務体験の様子

研修スケジュールの詳細は表1のとおりである。

筆者は昨年まで医学図書館に勤務していたことから、ソウル大学校の医学図書館についても興味があり、また、ILLやレファレンスや電子的サービスにも特に関心があった。研修プログラムでは、分館も含めてほぼ全ての部署を訪問できるようにしつつ、これらのテーマに比重が置かれるようにも配慮していただいている。

加えて、スケジュールの後半は、ソウル大学校の図書館だけでなく、他機関の図書館も訪問し、ICタグ等の最新設備やインフォメーション・コモンズの整備状況を見学することができた。さらには、韓国国立大学図書館セミナーなどで九州大学附属図書館についてプレゼンテーションを行う機会を得て、積極的に現地の

司書と意見交換を行うことができた。(写真5)

表1 研修スケジュール

日程	内容
1/12	図書館概要, 中央図書館ツアー(4~6F)
1/13	図書館システム
1/14-1/15	韓国国立大学図書館セミナー
1/19-1/22	電子的サービス
1/23	開架書庫管理, 貸出返却業務
1/28-1/30	雑誌契約・受入・目録
2/2	資料交換・寄贈
2/3-2/5	図書購入・受入・目録
2/6	奎章閣, 中央図書館ツアー(1~3F)
2/9-2/10	歯学図書館, 医学図書館
2/11-2/12	研究支援サービス
2/16	貴重書庫管理
2/17	国内 ILL, レファレンス資料管理
2/18	海外 ILL, 会員サービス, 非図書資料管理
2/19	マルチメディア資料管理
2/23	成均館大学校図書館
2/24	国立中央図書館, 国立デジタル図書館, 議政府市図書館
2/25	農学図書館, 高麗大学校図書館
2/26	社会科学図書館, 延世大学校図書館
2/27	法学図書館, 経営学図書館
3/2	国会図書館
3/4	研修成果発表会

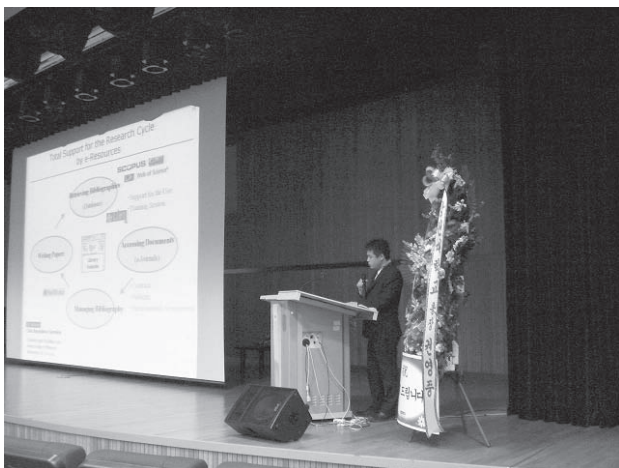


写真5 国立大学図書館セミナーでの発表

なお、一日のスケジュールは、基本的にソウル大学校職員の勤務体系に合わせて、9:00 までに図書館へ出勤し、9:30 頃から実務研修を開始。12:00 から 13:00 ま

で昼休みをとって、13:30 頃研修を再開。16:00 頃に実務研修が終了するので、その後自己研鑽に励み、18:00 になったら勤務を終了して帰宅または韓国語クラスへ参加するという流れであった。

3. ソウル大学校

ここで、ソウル大学校図書館について注目した点やその印象を述べる前に、まずはソウル大学校の概要を簡単に説明しておく。

ソウル大学校は韓国で初の国立総合大学である。1946 年に旧京城帝国大学などの資産を引き継いで創立され、その後、キャンパス移転や統合を経て、現在は冠岳キャンパス(メインキャンパス)と蓮建キャンパス(病院キャンパス)の2キャンパスをソウル市内に持つ。16の大学(college)からなり、その中でも71学科が修士課程、72学科が博士課程まで提供し、他にも7の専門職大学院がある。2007年4月の時点で学生23,231名、教員・研究員5,011名、職員998名の規模大学である。

ソウル大学校は韓国において最高峰の教育研究機関である。国立大学入学試験で上位1%の成績を収めた者だけが入学でき、社会的影響力のある卒業生を多数輩出している。2007年4月のCEOBANK調べによれば、トップ500の韓国企業のCEOのうち33.5%が当大学校出身者であるという。また、同年同月のDongA Daily調べによれば、韓国政府の大臣・副大臣のうち43.9%が当大学校の卒業生であるともいう。さらに、THE-QSによる世界大学ランキング¹⁾の2008年版では全大学中50位に位置しており、韓国の大学としては最高位の評価を得ている。

なお、日本の国立大学は2004年に法人化されたが、同様に、韓国でも2010年にソウル大学校の法人化が計画されているそうである。

4. ソウル大学校図書館

次に、ソウル大学校図書館についての概要や注目した点について述べる。

4.1. 概要

ソウル大学校図書館は8つの図書館から成る。そのうち、冠岳キャンパスには社会科学図書館、経営学図書館、農学図書館、国際学図書館、法学図書館の5分館および中央図書館があり、蓮建キャンパスには医学図書館、歯学図書館の2分館がある。中央図書館は冠岳キャンパスのまさに中央に配置されている。これは、図書館建設当初の1975年にキャンパスのどこからでも5分以内で図書館へ行けるように考えられたからだという。

参考までに建物の延面積や蔵書数など図書館の規模を表2および表3に示す。全館の総延床面積は約4万4千㎡であり、約370万冊の図書を所蔵し、2万5千タイトル以上の電子ジャーナルを購読している大規模図書館であることが分かる。ちなみに、2008年度の図書費予算は8,436,451,000ウォンである。

表2 ソウル大学校図書館 概要データ

図書館名	延面積(㎡)	座席数	職員数
中央	30,506	3,925	88
社会科学	2,704	608	7
経営学	1,273	350	3
農学	2,427	314	5
法学	1,247	115	8
医学	4,294	566	8
歯学	768	128	3
国際学	814	127	4
合計	44,033	6,133	126

※延面積および座席数は2008年12月31日現在

※職員数は2009年2月1日現在

表3 ソウル大学校図書館 資料規模

図書館名	冊子体		eリソース		
	図書	雑誌	eBook	eJournal	DB
中央	2,308,629	3,519	248,453	22,924	104
社会科学	74,544	374			1
経営学	38,163	284			17
農学	164,290	383		113	
法学	107,883	588			3
医学	192,286	844	573	2,739	41
歯学	23,358	261	45		
国際学	43,994	449	2		1
その他	759,865	15			
合計	3,713,012	6,717	249,073	25,776	167

※冊子体・図書は2008年12月31日現在の所蔵冊数

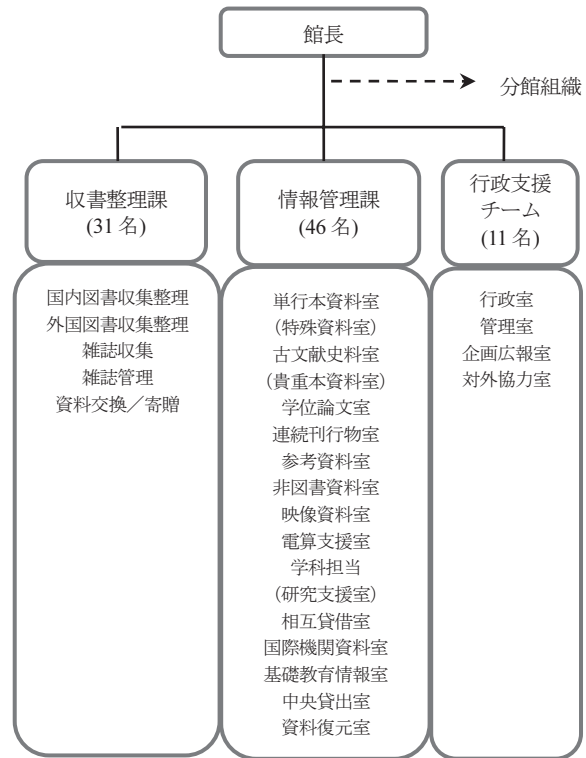
※冊子体・雑誌は2008年度の受入タイトル数

※eリソースは2008年度の購読数

4.2. 組織

図書館組織は中央組織（中央図書館）と分館組織に分かれ、外国雑誌契約や電子的サービス管理はある程度中央組織に集中化されている。図表1の通り、中央組織は2課1チームで構成される。テクニカルサービスを受け持つ収書整理課、主にパブリックサービスを受け持つ情報管理課、会計・庶務・施設管理等のアド

ミニストレーション的な役割を担う行政支援チームである。



図表1 ソウル大学校図書館 簡易組織図

ソウル大学校図書館の組織体系で特徴的なことは、「室」という単位で部署を細かく分けていることである。特に、情報管理課内の各部署のほとんどは末尾に「室」という名称が付いていることに注目したい。例えば、貸出返却業務を担当する「中央貸出室（중앙대출실）」、開架書架の管理を担当する「単行本資料室（단행본 자료실）」といった具合である。

つまり、「単行本資料室」というのは、一般図書を配架している書架スペースの名称でもあり、そこを管理する部署の名前ともなっているわけである。

このようなかたちで、一般図書だけでなく他の図書や雑誌も、資料タイプ別に配架スペースが分かれており、そのスペース（資料室）の数だけ担当部署が分かれている。図表1にあるとおり「古文献史料室」「参考資料室」「非図書資料室」「映像資料室」「連続刊行物室」などであるが、それぞれの室にカウンターがあって、簡単な利用案内や資料出納や書架マネジメントなどを行っている。これは、利用者の前面にきめ細かく職員を多く配置するという利用者サービス重視の表れではないかと思われる。また、資料タイプ別に組織を分けることによって、その資料特性や状況などについて職員が把握することが容易になり、資料の有効活用

が図れるのであろう。

4.3. 注目した点

その他に注目した点について一部を以下に述べる。

4.3.1. VOD

ソウル大学校図書館の提供する VOD(Video on Demand)とは、学会やセミナーなど学術的イベントの講演を録画して Web で公開するサービスである。このサービスで特徴的なことは、撮影自体を利用者からの要求に基づいて行うことである。ソウル大学の所属者であれば誰でもオンラインで撮影のリクエストができる。撮影および動画の編集から公開までの作業は図書館職員の手で行われている。(写真6)

また、利用者からのリクエストだけでなく、図書館独自でもデータベース講習会の様子を記録する際などに VOD を活用している。図書館ホームページにおいてデータベースの紹介文とともに、この映像へのリンクを添付して利用者の便宜を図っている。



写真6 VOD撮影の様子

4.3.2. Korean Medlas Center

ソウル大学校の医学図書館はアメリカの National Library of Medicine (NLM) との協定により韓国の Medlars Center となっている。Medlars Center の役割としては、Pubmed などデータベースの利用指導や広報活動、および、NLM との ILL の仲介などで、生物医学に関する全国的な情報センターとして機能している。

4.3.3. レファレンスサービス

ソウル大学校図書館においては、教員との結びつきを重視して、「学科担当/ライブラリー・リエゾン」という名称でレファレンスサービスを展開している。10名ほどの司書が、人文、社会科学、自然科学、工学、教育の5つのグループに分かれて、それぞれ関連ある学科の担当として、教員の要望に応じて先行文献調査などを行っている。アメリカのサブジェクト・ライブ

リアンがモデルであり、レファレンス業務以外にも、積極的に各教授の研究室を訪問して図書館に対する細かい要望や不満などを聞いて回っているとのことである。

4.3.4. 寄贈

ソウル大図書館では図書の寄贈受入に力を入れている。例えば、寄贈図書と刊行物交換だけを担当する専門の係があり、4名がその係に属している。また、図書館システムには寄贈受入のメニューが独立して存在する。寄贈図書専用のホームページがあって、多くの図書を寄贈してくれた方は、このページに名前が登録されるようになっている。

4.3.5. 学位論文

ソウル大学図書館では包括的に学内の学位論文を収集している。そもそも、院生は学位論文(修士・博士)を図書館に提出することが修了の要件となっているようである。院生はまず冊子体を4部納めなければならない。納められた4部のうち、2部は保存用・閲覧用としてソウル大学校図書館の所蔵となるが、1部は国立中央図書館へ、もう1部は国会図書館へと送付される。また、院生は図書館ホームページを通して学位論文の電子版も提出しなければならない。

電子版の学位論文は、OPACで検索ができ、特許や機密情報が含まれる例外を除いては、Webで全文が公開されている。

4.3.6. 図書購入

図書購入に関しては、年度初めに割引率など条件の良い書店1店だけと契約して、1年間はその書店だけと取引を行っている。ちなみに、現在、国内書は15%引き、それ以外は8%引きで購読しているとのこと。また、洋書のレートについては、検収時のレートを基準にするので、常に変動している。現在は、ウォン安の影響を受けて苦しい状況のもよう。一時、洋書の購入をストップした時期もあり、2008年度は洋書購読予算を19%増額したにもかかわらず、冊数は4%減となる見込みだそうである。

また、図書館システムと書店のシステムとが連携している。図書の発注情報が図書館システムからダイレクトに書店のシステムへ届くようになっていたり、チェックイン時に書店のシステムから表紙イメージや抄録などをダウンロードしてOPACへ搭載できるようになっている。

4.3.7. 雑誌契約

韓国でも雑誌やデータベースの価格高騰には苦勞しているようである。国家的には、KESLIやKERISによるコンソーシアムによって、コストを抑える努力をしているが、それだけでは、価格上昇を抑えられるもの

ではないらしい。

ソウル大学では、2009年からオンライン版と重複する冊子体の雑誌契約を中止するなどして少しでも出費を抑えようと努力しているそうである。しかし、ウォン安という現在の為替相場の状況もあいまって、大幅に予算が不足している状況であるという。

5. おわりに

最後にソウル大学校図書館の国際交流業務について言及したい。ソウル大学校図書館にはキム・ヨンエさんという国際交流業務の専任者が配属されている。筆者もキムさんには今回の研修で公私含めて非常にお世話になった。心から感謝申し上げたい。

さて、キムさんは残念ながらもうすぐ定年を迎えられるそうであるが、1994年に図書館に採用されてから15年間この国際交流業務を務めあげてきたという。ソウル大学校図書館では2～3年で人事異動となるのが通常のサイクルであるが、同じように海外への窓口となる人物がすぐ変わってしまうと、対外的な信頼を積み重ねることが難しくなってしまう。図書館交流といっても、結局は人間同士の交流であるから、海外の図書館とこれまで築き上げてきた友好関係を消滅させないためにも、キムさんのように異動をせずに窓口を安定させることは重要である。

少なくとも、九州大学附属図書館においてソウル大学校図書館との関係は筆者が永続的な窓口になれるように、今後も韓国語や英語によるコミュニケーション能力の向上を目指していきたい。そして、この交流を契機に、お互いの図書館がさらに切磋琢磨し、成長を図っていければ誠に嬉しい限りである。

謝辞

研修を無事に終えることができ、ソウル大学校図書館長様以下、収書整理課、情報管理課、行政支援チームの多くの方々に感謝します。特に2ヶ月間、同じ事務室で働きました企画広報室および対外協力室の皆様々に感謝します。ソウル大学校図書館に勤める一人一人の心に暖かさ、いや、火傷しそうなほどの熱を感じました。

また、私を快く送り出してくださった九州大学附属図書館の皆様にも感謝します。特に、eリソースサービス室の皆様、医学図書館の皆様、不在の間、ご迷惑をおかけしました。

どうも有難うございました。

参考文献

- [1] “THE-QS World University Rankings.” QS. <http://www.topuniversities.com/worlduniversityrankings/>, (accessed 20